

## ｜ 卷 頭 言 ｜

# 『教職への道』40年目、 別府女子大学設立70周年、 教職課程70年目

別府大学教職課程委員会

委員長 **今井 航**  
(文学部教職課程)

この『教職への道』は、いまから39年前の1981（昭和56）年に創刊された。今号で40年目を迎えたことになる。

いったい、どのような想いがあって作られるようになったのか。その前年、1980（昭和55）年に別府大学に奉職されたばかりの川瀬泰治先生（別府大学名誉教授）は、創刊号において次のように述べている（『教職への道』創刊号、1981年、3頁）。

（前略）。将来教職を旨とする学生が教育に関わる現状を把握し判断し、一日も早く具体的な努力を始めることを願って作成された。教育実習の体験や教員採用試験の現状、実際に教師として活躍している先輩達の声を読んで、ぜひ各自が確固たる進路を打ち立ててもらいたい。

その願いや、本冊子の骨子は、いまに確固として継承されている。

30年以上もの長きにわたり本学の教職課程を支え、中心者として、その発展・充実を図り成し遂げてこられた川瀬先生は、いまから4年前の2016（平成28）年に御退職なさった。うれしいことに、『教職への道』40年目を記念し、このたび先生より特別にご寄稿を賜ることができた。

そこでは、日本の教育の現状やそれを取りまく日本社会全体の姿を、先生らしく俯瞰的に鋭く見つめられ、問題点を掴み、そのうえで「子どもたちと日頃接する教師がまず世間からの脱却を図り、自立した個人の姿を子どもたちに示すことが必要」である



と述べられている(今号、3頁)。あとの「特別寄稿」に是非とも目を通して頂きたい。

さて、続報である。前々号に「2014～18年度の5年間における公立学校教員採用者数」を示したことがある(『教職への道』No.38、2018年、1頁)。これに、その後の2年間を付け加えた結果が下の表である。この7年間では、計66名が公立学校の教員に採用されている。うち62名が卒業後に選考試験に合格を果たし採用された者で、あとの4名は現役合格者である。

表：2014～20(平成26～令和2)年度の7年間における公立学校教員採用者数

(単位：人)

| 学科名     | 2014 | 2015 | 2016 | 2017 | 2018 | 2019 | 2020 | 計  |
|---------|------|------|------|------|------|------|------|----|
| 国際言語・文化 | 2    | 3    | 3    | 7    | 6    | 9    | 6    | 36 |
| 史学・文化財  | 4    | 5    | 5    | 1    | 1    | 6    | 4    | 26 |
| 人間関係    |      |      |      |      |      | 1    |      | 1  |
| 食物栄養    |      |      |      |      |      |      |      |    |
| 発酵食品    |      |      |      | 1    | 2    |      |      | 3  |
| 国際経営    |      |      |      |      |      |      |      |    |
| 計       | 6    | 8    | 8    | 9    | 9    | 16   | 10   | 66 |

注1) 国際言語・文化学科には、旧国文・英文・芸術文化の各学科の卒業生を含む。

注2) 史学・文化財学科には、旧史・文化財の各学科の卒業生を含む。

注3) 発酵食品学科には、旧食物バイオ学科の卒業生を含む。

注4) 国際言語・文化学科の2017年度の7名には、現役合格者2名(中学国語/中学英語)が含まれる。同じく2019年度の9名には、現役合格者1名(中学国語)が含まれる。また、史学・文化財学科の2020年度の4名には、現役合格者1名(中学社会)が含まれる。

この2年間に限って見ると、連続で1名ずつ難関を突破して高校書道に合格したり、あるいは近年では珍しく中学美術に合格したり現役で中学社会に合格したりしていることが特筆される。また、卒業してから小学校教諭や特別支援学校教諭の免許状を取得した者から、小学校に2名、特別支援学校に5名が合格している。

たほう、この表には含まれない私立学校の採用者も、この7年間では把握できるだけで計18名を数える。また、このほか臨時講師や非常勤講師などを

務めながら選考試験の突破を目指し続けている卒業生も数多い。

こうしたことは、いうまでもなく近年に限った話ではない。たとえば、手元の『別府大学通信』第31号(別府大学広報委員会編、1987年4月10日)6面に目を向けると、その前年、1986(昭和61)年度の合格者名を一覧できる。その数は、旧国文学科2名、旧英文学科1名、旧史学科9名、旧美学美術史学科1名の計13名(現役合格の史学科3名を含む)であった。いまから34年前の『教職への道』6年目のことで、川瀬「青年」が活躍されていた頃である。

なぜ、その頃も、40年目の今も、こうして変わらず一定の教員を輩出できるのか。

2020(令和2)年に、本学は、前身の別府女子大学の誕生から70周年を迎える。教職課程が開設されたのは、その翌年、1951(昭和26)年であった。教職課程は、その開設から70年目を迎える。

およそ70年前、1950年前後の一般大学における教職教育は、「教育職員免許法によって規定されていたが、設置審査を経て大学が発足した後は、個別大学の自主的運営(自治)のもとに行われていた」と言われている(海後宗臣編『戦後日本の教育改革』第8巻教員養成、東京大学出版会、1971年、126頁)。

別府女子大学の設置申請書による発足時の教官人員構成並びに担当科目を見ると、「教職課程科目」の専任教員に2名が置かれ、うち1名は創立者の佐藤義詮先生で、担当科目は「教育制度及び行政」であった(『別府大学の三十年』佐藤学園・別府大学、1978年、45頁)。また、そのご教職課程の開設時には、なんと9名の専任教員が置かれていた(同、51頁)。

こうした当初における創立者の配置/開設時の比較的多いと見られる専任教員数などに、別府大学教職課程の独自の原点があるように思われる。いまに続く教員輩出の源流をたどろうとすると、そんな発見にも至るのである。